

## 地域おこし協力隊 ～3年間の歩みとこれから～



総務省が地域おこし協力隊を制度化したのは2009年のこと。人口減少や高齢化、担い手対策のひとつとして、地域外の人材を受入れ、隊員が地域協力活動に従事していくことで地域力の維持・強化を図っていくことを目的としている。四万十町でも平成24年度よりこの制度を活用しており、四万十町初の地域おこし協力隊として着任したのが左写真の渡邊光明隊員である。地域の外からやってきた隊員が見ず知らずの地域に入ってどんなことに取り組めるのか、任期満了後は原則定住とされているが果たしてどうなるのか。今月号は、先月7月末に地域おこし協力隊から卒業した渡邊さん取材した。



渡邊光明さん（40）。香川県出身で、前職は東京でキッズニアのマネージャーを勤めていた。東京での生活や教育は渡邊さんのリズムにはあっておらず“違和感”を感じる度が度々あったという。そこで、自身に子どもが出来たことや東日本大震災をきっかけに田舎への移住を決意。奥様と小さなお子さんを連れて、四万十町の地域おこし協力隊として着任した。

四万十町の中でも渡邊さんが担当したのは大正地区の北部エリア4集落。全体で約120世帯300人程度の規模の地域で高齢化率は約54%、課せられたミッションは交流人口の拡大であった。担当地域の第一印象は、とにかく広範（全集落を回するのに1日かかる）でそれぞれの集落が個性的、地域資源が多くあるという印象だったという。そこで、行政職員としての強みを利用し、自分の性格（段取りを組むのは得意、話好き、人見知りしない）やこれまで培ってきたスキル（営業職時の企画・プレゼン能力）を活かせる仕事に集中しようと考え、四万十川流域で盛んな農業・林業ではなく、企画・販売の路線で地域に関わっていくことにした。

そうは言っても右も左も分からない1年目は、とにかく地域に足を運んだ。顔を合わせて話をし、集落の空気感や成り立ちを知ることには努めた。地域のイベントは極力手伝い、頼まれごとには快く引き受けた。またミッション達成の為に任意団体を組織し、研修を行った。2年目になるとようやく人の顔と名前が一致し、話かけるのが楽しくなってきた。また、行政上の仕組みに詳しくなってきたこともあり、自ら声掛けをして地域で座談会を企画。課題解決に向けて何が必要か絵にして説明を行い、地域をリードしていった。この頃になると渡邊さん自身の名も広く知れ渡り、移住者としてや地域おこし協力隊としていくつもの発表の場をもらえるようになった。さらには学生や移住者、ほかの協力隊など外とのつながりが形になり始めたのもこの頃である。3年目となる最終年度は、地域への貢献とともに任期終了に向けて自身の準備を進めていった。今後を考えるために自分の立ち位置を再確認し、人とのつながりを活かしながら志を同じくする仲間づくりに取り組んだ。地域のことを自分のことのように考えることで埋もれた人材の発掘を目指す「大正ジブシゴト会議」もそのひとつである。これらの取り組みの結果、任期満了後は地元住民が作った会社である「エコロジー四万十」に就職することが決まり、仕事内容についてはこれまでの3年間の活動をそのまま継続していただける形となった。

3年間を振り返ってみると、これと言って大きな成果は残せていないと渡邊さんは話していた。確かに資料として文字に起こしてみると、なかなかその成果は見えにくい部分があるのかもしれないが、外の目で見ると、この3年間で大正地域には渡邊さんという信頼できるマンパワーが増えたと感じる。行政職員としての立場もあったかもしれないが、大正地域で何かやろうと思うと、まず渡邊さんに相談してみるという流れができてきた。



 地域のことを自分のことのように考える場  
大正ジブシゴト会議

いま大正の30年後を考えることができたよ

平成25年5月10日開催の日本赤十字会連合会の分科会報告によると、2045年10月1日現在の人口は約1億3000万人と推定され、2070年現在は約1億7000万人と推定されています。2070年現在の人口は、2045年現在の人口の約1.5倍と推定されています。また、2070年現在の人口は、2045年現在の人口の約1.5倍と推定されています。また、2070年現在の人口は、2045年現在の人口の約1.5倍と推定されています。

見たいのは、何か、

必要なのは、地域に属する問題を「自分のこと」として考える、必要な人、そしてその「誰か」探し、考え、共有できる場所、

自分たちの存在意義、これから住み続けたい地域で、

自分たちの未来をどう描いていくか、

そのために、この会議を始めることにしました。

あどきに似ているかもしれない

「大正町民協議会」

第4次大正町民協議会報告書に「大正町民協議会」の目的として、

大正町に「人なつてい」つに「大正町民協議会」の目的として、

大正町に「人なつてい」つに「大正町民協議会」の目的として、

## 幸せの形に寄り添うこと

地域に入り、地域と共に行動を起こしていく時に大切なことは「それぞれの幸せの形を理解し、寄り添うこと」だと渡邊さんは話してくれた。地域を良くしたいという思いが独りよがりになっていないか、地域の意思を尊重したものになっているか冷静に考える必要がある。そうしないと、良かれと思って取り組んでいることも、ただのありがた迷惑になってしまうからだ。地域の外から来た人がすることなら、尚更そう感じるだろう。実際に、渡邊さんも着任して間もないころは、熱い思いが先行して地域の人とうまくいかず気を落とした時期もあったという。

最近地域づくりという言葉をよく耳にするようになったが、時々感じていた違和感は、渡邊さんの一言で解消されたような気がする。地域づくりはもちろん必要だが、すべての地域が常時盛り上がっている必要も活性化している必要もない。外からできるサポートは、無理矢理アクションを起こすことではなく、地域が必要とした時に必要な手助けができること。またいつでもアクションを起こせるように常日頃から地域内の関係づくりをしておくことではないだろうか。

目に見える成果がたくさんあることではなく、地域がどれくらい幸せになったか。そのものさしで測ってみると、3年間という短期間で渡邊さんが成しえたことは大きい。むしろ、渡邊さんだからこそできたことなんだと感じた。

## 財団事業報告

### ●「川遊びが1日で好きになる！～楽しい川遊びの作法～」を開催しました。



毎年企画している川遊びイベントを行いました。

今年度はかわらっこさんの協力を得て四万十市で開催。午前中にエビ玉作りと川遊びによる環境学習及びライフジャケットの役割と体の浮かせかたを学ぶ安全講習を行いました。また午後からはカヌーに乗って四万十川下りを体験。小学校中学年の参加者が初めての1人乗りカヌーですすい川を下っていく姿にはとても驚かされました。安全に楽しく川遊びをしてもらうため、来年もまた企画しますので、参加されたい方は財団のHPをチェックしてください。

### ●川口小学校の子ども達と水生生物の調査を行いました。



四万十町立川口小学校前を流れる井細川（四万十川の支流）で、川口小学校の5、6年生と一緒に水生生物の調査を行いました。事前に座学で川虫の採取方法や種類を学習した後、川に移動して調査を実施。なんとスコア値10のアミカを発見し、皆で喜びました。昨年から続けて2回目の調査。継続的に行っていただけるよう学校と連携を図ります。

四万十川財団では水生生物の調査補助を行っています。指導料も必要ありませんし、財団の所有する備品を使っていただくことも可能です。興味のある方がおられましたらお気軽にお声掛けください。